平成23年度（第20回）ブループラネット賞
受賞者記念講演会講演録

ベアフット・カレッジ

公益財団法人 旭硝子財団
THE ASAHI GLASS FOUNDATION

本当のプロフェッショナリズムとは：ベアフット・アプローチ

ベアフット・カレッジ
創設者　バンカー・ロイ

農村地域に住む貧困層のエンパワーメントとは、彼らのある種の能力を養うことを意味します。つまり、自信を持って自分の行動を自分で選択する能力の改善を図るということです。しかし、こうしたエンパワーメントを実現するために採用されてきた従来のアプローチはこれまでのところ失敗に終りました。貧困層の支援に援助国や西洋の専門家が適用したアプローチは、農村住民の自助努力による開発を度外視した、横暴、トップダウン、無神経かつ高くつく手法だったのです。社会から疎まれ搾取されている者や極貧層から、自分で決断を下す機会を奪ったこのアプローチは、貧困層を無力化させ、他者に依存しないと生活改善ができない非常に無防備な状態に放置しました。さらに、こうした善意ある「資金援助者」は、自身の犯した間違いから学ぶことを頑なに拒んでいます。機能しないプロセスに単純に無駄金をつぎ込み、行き詰まりの状態に陥っているのです。

農村の問題研究は十分に実施されたにもかかわらず、都会の解決策を押し付ける手法が、世界中の貧困者をますます貧困化させている事実を示す確固たる証拠もあります。これらは貧困者が必要とする解決策ではないのです。膨大な証拠書類も有りますが、今の彼らに必要なのは実践です。アイディア、アプローチ、手法の切磋琢磨なくして抜本的な変化は成し遂げられません。貧困者をエンパワーする方法は実に沢山ありますが、これら手法の一つが「ベアフット・アプローチ」なのです。

ベアフット・アプローチは、生活の質をどのように改善したいかという決定権を貧困層に与えることから始まります。都市部出身の専門家が「近代」の解決策を村に持ち込むべきかを選択する権利を貧困者自身に与えなければなりません。すでに住民が持っている素晴らしい技術、人材、金銭的なリソース等の情報・知識と照らしあわせて、自ら外部の助言や技能に依存すべきかを決めることができなければならないのです。自らのニーズの充足に特定の知識を活用するかどうかを決めることも可能です。彼らに必要なのは、自らの努力で発展を遂げる機会と余裕なのです。

精神的かつ物質的な余裕さえ与えられれば、外部専門家の介入や助言がなくとも、貧困層は驚くべき事を成し遂げることができます。しかし問題となるのは、持続可能な開発が従来のアプローチでは達成されていないにも関わらず、人々はトップダウン手法を反転させボトムアップから始めることに躊躇するという点です。代替案となる対照的な運営モデルはほんの少数しか提案されていません。既成概念を超え、草の根の力を総動員したコスト効率の良いアプローチを採用し、地元地域の知識および技能を基盤に発展を遂げる方法は幾つもあります。こうしたアプローチを広範な地域に普及させることも可能なのです。

ベアフット・アイディアの起源

私はインド人が受けられる最高レベルのエリート主義で気位ばかり高い、学費も高額な私立教育を受けた後、1971年にインド ラジャスタン州にあるティロニア村に移り住み働くことにしました。村に着いた後、お年寄りたちが投げかけた質問に衝撃を受けたことを今でも覚えています。「警察に追われているのか？試験に落ちたのか？政府の仕事に受からなかったのか？個人的な問題があるのか？なぜここにいるのか？なぜ街からこの村に移ってきたのか？ここには年寄り、女、子供しかいない。若者はみんな去っていった。」

若者らは仕事（村から離れられる仕事なら何でも）を求めて村から去って行きました。それは一般の社会通念において農村の生活、技能、伝統はないがしろにされ、収入や生活の質を向上させる望みがほとんどないと思われていたからです。こうした若者は数千人もの「卒業生」を輩出する小さな町の三流の技術学校や

大学からの卒業証書を手に、街に行けば高収入で安定した仕事を得られると期待を膨らませていました。しかし現実には、インドの市街地にあるスラムや道端で生活する有学歴の失業者層を増大させるだけとなったのです。

なぜ彼らは職につけないのでしょう？それは彼らの卒業証明書には何の価値もなかったからです。毎年創出される数千人の有資格の医師、教師、エンジニアは、実務経験を持たない形だけの専門家となっています。彼らは、本来はその恩恵に浴すべき人々にとって頼りにならず、求職者に十分な雇用を創出しないシステムの犠牲になっているのです。土木技師はすぐに壊れる道路を建設し、水道技師はすぐこわれたり亀裂が入ったりして使用不可能なタンクを建造します。医師は対症療法に専念し病気の予防についてはほとんど無知です。仕事がないにも関わらず、それでも職を求める若者は、劣悪な都会のスラムで人間以下の存在として生活しています。村に帰れば屈辱や軽蔑に晒されることから帰郷することもできません。村に戻る者は堕落者と見なされ、一家の恥となります。

村を去った時、若者たちは伝統技能を次の世代に伝えて欲しいという親（機織り職人、鍛冶工、陶器職人、建築家、大工、農民）の切望も砕きました。家族だけでなく、その土地その土地に順応しながら年寄りらが代々育んで蓄積してきた知識を置き去りにしたのです。こうした知識は正規の教育制度では重要視されませんが、威厳と自尊心を備えた農村社会の開発においては不可欠な要素となります。正規の教育制度は、若者達が自らのルーツを劣視する傾向を生み出したのです。

土を掘り、爆破して井戸を造る単純労働者として5年間ほどティロニア村に住み働き、多くの貧困者と出逢ったことは、私にとって非常に素晴らしい経験となりました。ベアフット・カレッジの慎ましい創設の呼び水となった「学び直す（アンラーニング）」プロセスを体験したのは1967年から1971年にかけての事です。

過去40年間で私たちが「学び直した」事は、農村住民がその創造力や技能でもって問題を特定し解決しようとして、問題に取り組む際には互いに助け合おうとする無限の能力を持つことを全く過小評価していた点です。

さらに、社会から取り残された農村貧困者のエンパワーメントとは、問題を解決する能力、つまり自ら選択し、自信を持ってそれに基づいて行動する能力の養成だということも学びました。

また、同カレッジは農村貧困者が本当に何を必要としているかについても理解しました。これらの人達は、自らのアイデンティティを主張し、自分らの知識や技能が時代遅れ、二流、不要ではないということを実証する必要があったのです。自分達に固有の、そして特別な状況に見合った農村に立地する学校を必要としていたのです。年月をかけて徐々に自尊心や自信を養う場、自分らのものであると感じることのできるような場所が必要でした。

ベアフット・カレッジは、従来の制度が見せる（持つ）信じ難い無知や傲慢、貧困撲滅に不可欠な貢献を果たすという信条とは全く対照的なものです。事実、こうした従来のアプローチは非生産的で、危険でさえあるのです。

ベアフット・カレッジとは何か？

ベアフット・カレッジは、ガンジーの生活および職業スタイルを遵守するインドで唯一の学校です。貧困層のために貧困層によって設立された唯一の大学で、過去40年間貧困者によって運営、管理、所有されてきました。ベアフット・アプローチの中核にあるのは、一般社会から取り残された貧困層の知識、創造力、実践知、生存能力が、地域の自立および持続可能性に向けた唯一の解決策であるという確固たる信念です。農村に不可欠なサービス提供に、都市部の実務経験のない医師、教師、水道技士ではなく、失業者や雇用可能だが識字力の低い地元の若者を活用するというアイディアはまさに革新的と言えます。しかしながら、これはベアフット・カレッジでは毎日のように実現されていることなのです。

ベアフット・カレッジは、学位証書、卒業証書、博士号が失格条件となる唯一の大学です。人々は識字力

や学歴ではなく、誠実さ、威厳、慈悲、実践的な技能、創造力、適応性、聞いて学ぶ意志、差別することなく多様な背景の人々と協働する能力といった特性を基に評価されます。

「ベアフット」という用語は、象徴的かつ文字通りの意味を持ちます。同カレッジで、働き、教え、学び、「学び直し」、技術的スキルを提供する人々は、学位証書を受領することもなく、裸足（ベアフット）で自分の村に帰っていき、そのまま裸足で生活し続けるのです。彼らの目標はライフスタイルを変えることではありません。自分の村に不可欠なサービスを提供するために必要な基本的技能を身につけることなのです。都市部出身の専門家がこうしたサービス提供を現在試みているところですが成功には至っていません。その間、彼らは自身と地元地域にとって健全かつ持続可能なライフスタイルを維持しているのです。

ベアフット・カレッジは、従来の「大学」というコンセプトから極端に逸脱したもので、試験や資格証に頼らず、実用的な知識や技能を「実践／行動から学ぶ」プロセスから修得することを奨励しています。これは、家族、コミュニティ、個人的な経験から吸収する学習を促進および重視するものです。農村への帰郷を促すため（都市への移住の流れを戻すため）、意図的に学位証書は発行していません。地元地域に不可欠なサービスを提供することで生活の質を改善できるのであれば、正気の人間なら、都会のスラムで想像を絶する悲惨な生活をすることを望むはずがないでしょう。いずれにしろ、ベアフット・プロフェッショナルは学位証書を受領しないため、残念ながら都市部の人々が彼らの技能を真剣に重要視することはありません。

ベアフット・カレッジの理念は、代替教育、伝統的な知識や技能の重視、自立の学習、普及という4つの主な柱で構成されています。

代替教育

第一点目として、ベアフット・カレッジはマーク・トゥエインの名言「学校教育に学習の邪魔をさせない」を軸に、教育の神秘性を排除していきます。マハトマ・ガンジーは、実用的な技能に重要性、価値、関連性をもたせ、伝統的な知識を日常生活の問題解決に活用することが、インド農村の発展に不可欠だと確信していました。ガンジーの思想は同カレッジに生き続けています。同カレッジではシンプルかつ地に足がついた（文字通り！）生活条件を重んじ、皆は床に座り、床で食事や仕事をします。誰も月150 ドル以上の給与はもらえません。

伝統的な知識や技能の重視

第二点目として、同カレッジでは農村の貧困者のアイディア、考え、願いを優先し、伝統的な知識、技能、実践知の重要性を尊重および重視します。親から子に口頭で伝える伝統を堅持することに価値を置いているのです。こうしたタイプの教育は、特定状況での生活難という長年の経験に深く根付いているもので、決して他とは置き換えることのできないものです。同カレッジは、村の若い男女、子供達に、この貴重なリソースを認識させ、そうすることで彼らが村に残り、都会に出てついにはスラムで暮らすことにならないよう努力を傾注しています。

これこそ同カレッジが、学位証書や資格を持ちプログラム参加を望む都市部の専門家をまったく重要視しない主な理由なのです。事実、資格を多く持ち過ぎている人は入学できない可能性もあります。残念なことに、インドの農村で40年過ごした経験を通じ、高い資格を持つ人々は農村で住み働くことに不適当（不適任）だということを学びました。彼らは、忍耐、謙虚さ、聞く力、開かれた姿勢、寛容、伝統的な知識や技能を尊敬する能力を備えていないのです。

自立の学習

三点目として、ベアフット・カレッジは、地元地域に役立つ能力強化に向けた学習を提供することで極貧者の自信と能力を養成します。その結果、極貧者が自信をもって自立することを可能にするのです。過去40年間に、数千人の失業者および雇用に適さない農村の貧困者が選抜され、ベアフットの教育者や技術者として訓練を受けました。

選考要件はシンプルです。識字力のない／ほとんどない／低い、最低レベルの、政府の仕事を得る見込み

のない農村に住む若者が選抜の対象となります。彼らは「ベアフット」教育者、医師、教師、エンジニア、建築家、デザイナー、コミュニケーター、手押しポンプ技術者、会計士としての訓練を受けます。「ベアフット」の専門家は、自ら農村社会の自給自足や持続可能性の実現に貢献しており、学位を持った都市部の「専門家」が不要だということを実証しています。

同カレッジでは、ベアフットの理念に基づき、各人が独自のカリキュラムに沿って個別に活動しますが、これら活動の中核として妥協の余地のない原則が定められています。

平等性） 同カレッジの参加者は、性別、カースト、民族性、年齢、学歴に関係なく、みな平等です。つまり、同カレッジには階層制が存在しません。同カレッジの創立者やディレクターと同等の立場と発言権を、新しく入学したベアフット会計士や身体障害を持つベアフット電話オペレーターも有しています。

質素な生活） 同カレッジの支給する生活費は極わずかです。最大支給額は月150ドルで、最低額はその半分です。これは一日当たり73ルピーに相当します。同カレッジでの生活条件は基本的なニーズに焦点を当て、無駄を最小限に抑えることを重んじています。

集団的な意思決定） 意志決定は個人ではなく集団で行います。例えば、生活費の支給額はカレッジの全員で決定します。この決定プロセスは、各人の自己評価と一定の基準に基づく他者評価によるポイント制で実施します。

ベアフット・カレッジは、インドの村にある完全にソーラー電化された唯一の学校施設です。この試みは1989年に始まり、ベアフットの太陽光発電技術者はこれまでに、合計40キロワットの太陽光パネルと各136個のディープサイクル充電池を備える5基のバッテリーを設置しました。太陽光発電装置のコンポーネンツ（インバーター、電池コントローラ、バッテリーボックス、スタンド）は、同カレッジに旨く組み入れられています。

農村女性のエンパワーメント

識字力のない／低い女性でも非伝統的な分野で成功できるのだという可能性を同カレッジが認識し始めたのは1980年代末になってのことでした。過去25年間同アプローチを実施する中で、同カレッジと連携する女性たちは素晴らしい能力を発揮しながら自信を持って農村コミュニティにサービスを提供し、女性の典型的なイメージや役割を打破してきました。

今日、非伝統的な役割を担う多くの女性が地元地域に貢献しています。「ベアフット」の女性達は、夜間学校の教師、手押しポンプ技術者、太陽光発電技術者、水道技師、建築家、タイル工、太陽光調理器の組立技術者として働いています。ベアフット・プロフェッショナルとして自己改善を図る彼女達にとって非識字が障害になることはありません。

コンピューターを扱いながら、技術、医療、データを収集する訓練を失業者の若者に提供する非識字の女性達もいます。

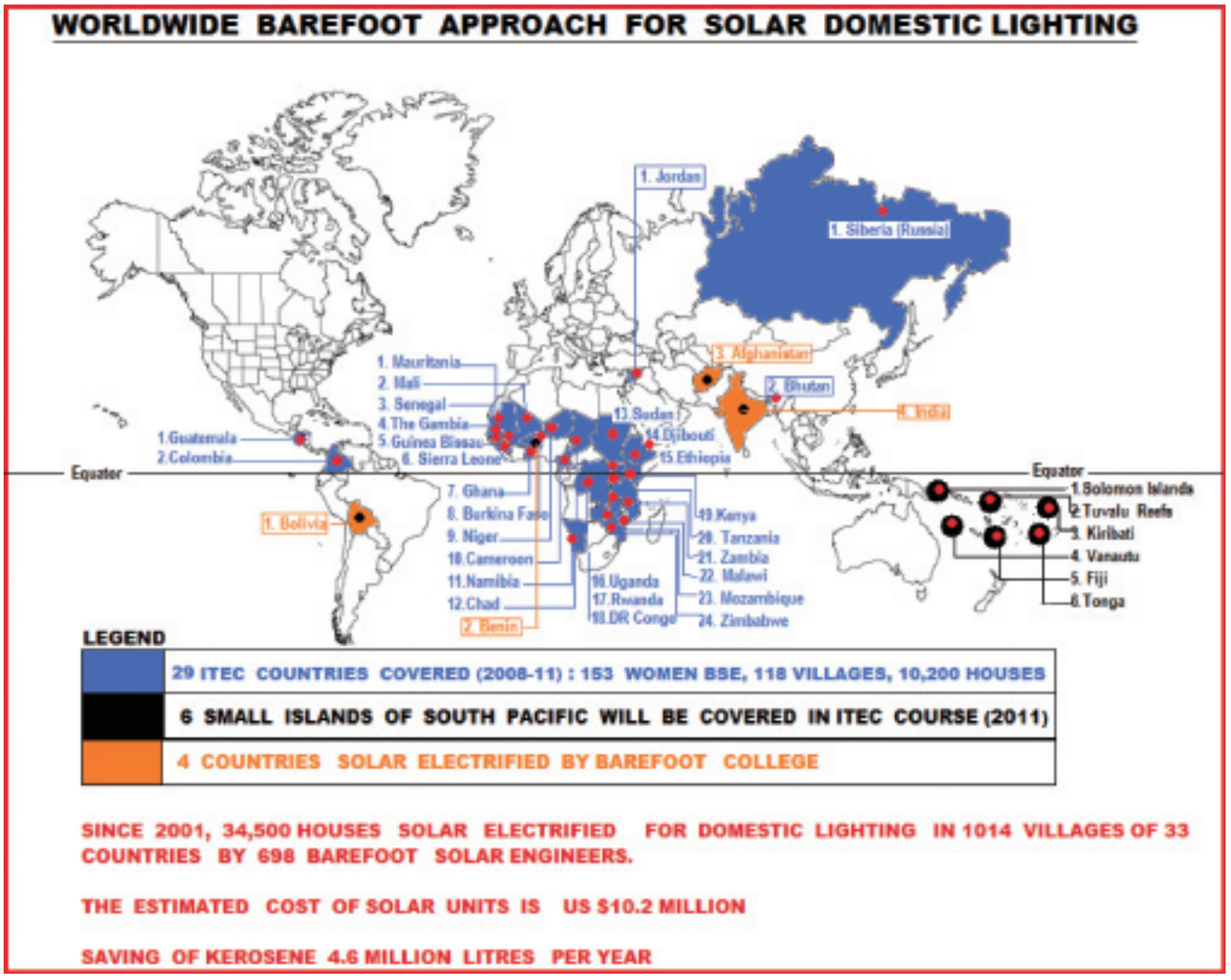
伝統的に女性の役割が大きい水管理や教育に関連するプログラムもありますが、太陽光発電技術の普及という役割は、（調理の明かりや燃料用の灯油確保という伝統的な役割に関連してはいるものの）彼らにとって全く新しい試みなのです。

何よりも素晴らしいのは、高度な太陽光技術の神秘性が打ち砕かれ、村の女性が生活の質を向上させるため同技術の効果的な管理・運営を実践したという点です。現在、彼女達には技術を取り扱う能力と自信を向上させる機会が与えられており、地元地域にサービスを提供することでその存在を認められ、尊敬を受けることができます。

農村の女性とは一般的に関連性のない分野において、不可欠かつ非伝統的なサービス提供を行う技術者に、識字力の低い女性を地域ぐるみで選抜するというプロセスが何よりも革新的なのです。こうした女性たちは、

村の各世帯に設置した太陽光システムの修復・維持に毎月の分担金を支払うよう地元住民を説得するため、組織的なリーダーシップの技能も養われます。このシステムが初めて設置された地域では、これまでの4年間規則通りに分担金の支払いが行われています。

世界中のエンパワーされたベアフットの女性



特に南半球の途上国における農村の太陽光電化に向けた分かりやすい非集中的なベアフット・アプローチは、**パートナーシップ**なくして実施不可能でした。

インド技術経済協力（ITEC）と呼ばれるインド政府の助成制度の下、約30ヵ国の途上国から200人以上の非識字のおばあちゃん世代の女性達がベアフット・カレッジで訓練を受けました。2009年から2011年までで、航空代や訓練費用に約70万ドルが費やされています。

ハードウェア（太陽光装置）は、ウガンダ、ニジェール、チャド、エチオピア、ガーナ、モザンビーク、ルワンダ、ブルキナファソ、カメルーン、ケニアを網羅するUNDPのGEF小規模助成プログラムに基づくグローバル協定の下で提供されました。

紹介:

エチオピアのベアフット太陽光発電技術者の一人であるファトゥマ･アブブカー･イブラヒムは、アファール州 ベイアヒルの村に住んでいます。彼女は初等教育を受けた20歳の独身で、同居する両親と共に3頭の牛、30匹のヤギ、3頭のラクダを2ヘクタールの土地で飼育しています。2006年7月より、ファトゥマはベイアヒルと周辺の村に設置された90基の太陽光システム、90個の太陽光ランプ、1軒の電気作業場の管理を行っています。

アワティフ・アブドゥラヘマンは、エチオピアのベニシャングルの村に住んでいます。ほとんど読み書きのできない25歳の既婚者で3人の息子がおり､家族と共に4ヘクタールの土地で農業を営んでいます｡アワティフは家事の傍ら、自分の村とその隣村に80基の太陽光システムを設置、維持、修復に2006年7月より従事しています。

アミナタ・ウォウレットは40歳でマリ共和国のトンブクトゥに位置するティンジャンベーン村に住んでいます｡1994年以来未亡人となり､学校教育を受けていないにも関わらず読み書きができます｡服のインディゴ染色、皮製品の作成、ヤギの面倒など別の技能も備えています。

ハジャ・ウォウレットは、10歳の娘を持つ32歳の未亡人です。非識字の彼女はティンジャンベーンで両親と一緒に住んでいます。

アミナタとハジャは、10日間で自分の村の92世帯を太陽光電化しました。ティンジャンベーンは、マリ国内で初めて、農村に住む女性が太陽光発電システムを設置した村となりました。

アジ・カメラはガンビアのカフェンケンにある村に住んでいます。30代の彼女は既婚者で4人の子供を持つイスラム教徒です。第7学年まで学校に通いましたが、その後中退しました。小さな所有地に3匹のヤギ、一頭の牛、4羽の鶏を飼育しています。彼女は1週間で40世帯に太陽光発電システムを設置し、これら装置はこれまで約1年間、稼働を続けています。

ナンシー・カヌはシエラレオネのカンタリネに住むイスラム教徒です。6人の子供を持つほとんど読み書きのできない40歳の彼女は、羊とヤギをそれぞれ1頭ずつ飼育しています。彼女はひとりで村の35世帯に太陽光発電システムを設置し、シエラレオネで初の女性太陽光発電技術者となりました。

こうしたエンパワーメントは、インドを超え、その他のアジア諸国やアフリカにも広まっています。過去11年間で、ベアフット・カレッジは農村に住む識字力のない／ほとんどない女性に、太陽光発電システムの組立、設置、修復、維持の訓練を提供してきました。ベアフット・カレッジで半年の太陽光発電トレーニングを受けるために村から選抜された女性達は、ティロニア村で高度な太陽光発電設備の組立、設置、修復、維持を行うための技能と自信を身につけます。そして、彼女らは自分の村に戻り、村の各世帯に太陽光システムを設置します。このようにして、装置の修復や維持用に毎月の分担金を支払う各家庭からの信頼を獲得することができます。

それまでアフガニスタンの非識字の女性が、半年国を離れ、インドで太陽光発電技術者の訓練を受けるという事例はありませんでした。これを2005年に実践したのが、ダイクンディのカタサング村に住む26歳のガル・ザマンです。 彼女とその30歳の夫モハメド・ジャンは、ティロニア村に半年滞在しました。二人は小さな土地を所有しており、家族10人を養いながら、年間200日以上日雇い労働者として働いています。二人は村の50世帯を太陽光電化するという歴史的な記録を達成しました。2005年9月から装置は順調に稼働を続けています。

ティロニア村で太陽光発電技術者としての訓練を受け、地元の村の若い女性の模範となった女性達は、太陽光電化を通して追加収入、新しいレベルの自信やリーダーシップを獲得します。電燈のおかげで夜間に手工芸や他の販売用の商品の制作を行うことで、別の追加収入の機会を得ることもできます。

課題と教訓

農村貧困者の知識、技能、実践的知識の適用を重視および尊重することこそ、ベアフット・アプローチが先進的および革新的である所以です。自立した持続可能な農村コミュニティの実現において、これが唯一の方法かもしれません。

農村社会に根ざし、水、空気、土壌、太陽の適切かつ賢明な使用に対して心の底からの尊敬を持つベアフット教育者は、天然資源を無駄／過度に搾取しないやり方の模範を示しました。彼らはまさに、マハトマ・ガンジーの格言「地球は、すべての人の必要を充足せしめても、ひとりの人の欲を満たしきることはできない」の実践者であると言えます。

このアプローチは都市部出身の「専門家」の固定観念を変えるのに大きな影響を与え、貧困層の人々に自力で自分達の問題を見出し解決するという考えに対する彼らの姿勢を変えました。

尊厳ある開発とは、都市からもたらされる技能への依存を減らしつつ自尊心を高めながら行う開発を意味します。ベアフット・アプローチはうまく行きました。その結果を誰もが見て感じ取ることができます。

主要な課題

新しい開発ビジョンの促進

一つ目の課題は、従来とは異なる開発ビジョンが実現可能であることを人々に納得させることでした。同カレッジはその短い歴史を通して、インドの農村出身（世界中の農村出身）の識字力の低い男女でも地元地域にプロフェッショナル・サービスを提供できるのだという事実を都市部の人々に納得させることに全力を尽くしてきました。同カレッジの活動結果から見ても分かることですが、貧困層に対する長年の固定観念、考え方、姿勢を変えるという作業は、非常に骨の折れる活動であることに違いありません。しかし、要職にある多数の人々が、私たちの活動について学び、ティロニア村を訪れ、その活動を直に見学してきました。こうした人々は、ベアフット･アプローチの精神を吸収し、自分が影響力を持つ範囲で同アプローチを普及･拡散しようとするため、キャンパスを訪れる一人一人が同カレッジの進展に寄与していると言えます。

成功への対処

二つ目の課題は、成功への対処です。同カレッジは、読み書きのあまりできない女性が農村に太陽光発電を導入し、形だけの学位を持った太陽光エンジニアよりも適切にこれら装置の管理を行えるということを証明してきました。そうすることで従来の固定観念を覆し、農村開発には正規教育が必要だという思い込みを打ち崩したのです。しかし残念ながら、開発に対する固定観念に対抗することで同カレッジに対する敵対心や妬みを生み、多くの敵を作る結果となりました。

ベアフット・アプローチに最も敵意を持つのは、正規教育を受け、そして得た見当違いの「専門性」を適用しようとすることに多くを投資してきた人々なのです。読み書きのできない女性が村レベルで物事を先導および管理できるという考え（概念）は、苦労の末に取得した資格や信頼性の価値を下げ、就職機会を脅かす存在となったのです。実際、ベアフット・アプローチが広く普及しているインドにおける成果の一つが、コスト高なイニシアチブおよび仕事を低コストで集中的なイニシアチブへ置換することで、農村における有給雇用の創出を可能にしています。

失敗から学ぶ

三つ目の大きな課題は、輝かしい失敗から学ぶということです。リスクを負って新しいアイディアを試し、失敗し、再度挑戦するというプロセスを同カレッジは重視しています。私たちは成功と同様に失敗からも学ぶべきと考えているからです。しかし、正規の教育制度では失敗の余地などなく、失敗は不名誉または後悔すべき事と見なされます。ベアフット・カレッジは、参加者に失敗する機会を与え、失敗から学ぶ機会を与えます。どのように優秀な組織でも危機に直面することがあり、こうした危機的状況は組織を粉々に破壊することもあれば、究極的に強化することもあります。1980年代初頭、同カレッジの意思決定が、都市部の

専門家（この多数が別の組織に移るか、正規の制度に戻っていきました）から農村の若者に徐々に移管されていきました。これは不確実性と不安定さを招く危機となりましたが、同カレッジはこの状況から、将来の意志決定について方向付けをし、影響を与えることとなった二つの重要な教訓を学び取りました。

1. 村に生涯残って生活するわけではない都市部出身の専門家に依存しないこと。物質主義に支配された世界では、彼らには実入りのいい仕事に就くため同カレッジを足掛かりに利用するという誘惑もあるでしょう。重要なのは、農村の貧しい人々の能力、自信、技能を養い、地元の村に自らサービスを提供できるようにすることなのです。結局のところ、都市部で訓練を受けた医師、教師、エンジニアが村に来る前から、農村住民は代々受け継がれ試練に耐えてきた知識や技能を堅持してきたのです。同カレッジの方針として、この方向に進んでいかない手はありません。そしてこれこそ、私たちが実践したことであり、同カレッジ成功のカギとなりました。
2. 自信がないときには最善の努力をすること。追いつめられた状況で、行き場所も頼る人もいない時、結果を直視するほかに選択の余地はありません。 危機が発生して暴力に発展する可能性がある場合、通常、都市部出身の専門家にはそこにとどまる力がありません。別に逃げ場所があるため、危機に直面する準備ができていないのです。

多くの側面でベアフット・カレッジは、より公正で創造的な世界の小宇宙であると言えます。私たちは特に、精神的および身体的障害を持つ人にも、健全な人と同じ、就労と社会に参加する機会を与えることを重視しています。薬の投与が必要だが、市場価格で購入できない人にはその1割、その支払い能力もない人は無料で、医療センターから薬を受け取ることができます。オフィスの不要となった紙は、袋、ペン立て、折り紙、教材などに再利用され、地元の夜間学校に供給されます。オフィスの設備、扇風機、照明はオフィスの屋根に設置した太陽光パネルで発電された電気で稼動し、宿舎の電気も太陽光パネルから電力供給しています。飲料水や衛生設備のニーズは、屋根の雨水採取槽と手押しポンプで充足されています。雨どいのネットワークで採集した雨水を大きく開口した井戸に流し込むことで地下水位（量）を維持する貯水システムを使用し、地元地域の環境強化に寄与しています。捨てられた点滴用のボトルとチューブは殺菌し、半砂漠地域にある同キャンパスの植物の灌漑に使用されます。

ベアフット・カレッジは、マハトマ・ガンジーが初めて提唱した、「貧困地域を開発するためのリソースは同地域の中に存在する」というアイディアを実践するものです。コミュニティを抜本的に変え、生活の質の改善を実現するにあたって、外部から人材、技術、金銭といったリソースを持ち込む必要はないのです。農村社会に存在するリソースは、正規の教育制度の要件に合致していないという理由で、あまりにもしばしば無視、軽蔑、劣ると見なされがちです。

しかしながら同カレッジは、学歴が全く／ほとんどないあらゆる男女が、地元社会に基本サービスを提供するための術を学べるのだということを実証してきました。自分は何もできないと思い込まされてきた農村の貧困層の固定観念を変えたということは大きな貢献です。途上国は、このベアフット・アプローチを適用することで膨大な利益を享受することができるでしょう。開発に係る役人の見方を変えるだけでなく、何よりも農村に住む貧困者の思考を変えることができるのです。生活改善に向けた「自分たちで（やれば）できる」という姿勢を植え付けながら、彼らの能力を尊重しない無責任な制度との長年の衝突で彼らが感じてきた無気力と絶望感を払拭するのです。

最初は、人に無視され、次には笑われ、そして戦いを挑まれる。 それから、あなたが勝つのだ。

—マハトマ・ガンジー

公益財団法人 旭硝子財団
〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2F
THE ASAHI GLASS FOUNDATION
2nd Floor, Science Plaza, 5-3, Yonbancho
Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081, Japan

Phone 03-5275-0620 Fax 03-5275-0871
E-Mail post@af-info.or.jp
URL http://www.af-info.or.jp